

Ⅲ シリカフ

シリカフ

SIRKAP

ツノザメ(?) / カジキマグロ(?)

- 語り手 Wáteke ワテケ (鳩沢ふじの)
沙流郡門別町字福満(旧地名新平賀)出身
- 録音日 1959年11月1日
- 録音場所 北海道勇払郡鷓川町春日3区 サタモ (平賀サダ) 宅

題名

sirkap シリカパ は ((W)):[「ツノザメ」、((S)):[「ツノザメ」。『知分動』:[「メカジキ」、『久神聖』:[「カジキマグロ」。その説明は、((S)):[「背中に大きな角が立っている、それで舟を突くと穴があく。肉はおいしい、真っ白でさしみにする、皮は少しつけて1寸(=3センチ)幅ぐらいに裂いて干して親戚じゅうに分けてやる」。この説明だとツノザメのようだが、一方、別のときに次のようにも言っている。((S)):[「夏だけとる。細く、5センチ幅、厚さ3分(=1センチ)ぐらいに身を裂いて長くして、竿にいっぱいにかけて、青ヨモギどんどんたいていぶす。くん製にしてから炊いて(=煮て)食べる。とつてもあぶらこい。くちばし6~7尺(=約2メートル)、体長2間(=3~4メートル)くらい。舟でも突かれたらおっかない(=恐ろしい)」。この ((S)) の説明によると、ツノザメではなくカジキまたはメカジキのようでもある。カジキとメカジキを同じ名前前で呼んだのかもしれないし、あるいはツノザメをも区別せずに、この名で呼んだのかもしれない。

ここでは、いずれとも決めずに両方書いておき、本文の訳では、謡い手自身の訳語のとおり「ツノザメ」と書いておく。正確に「ツノザメ」であるとは限らないことを念頭に入れておいていただきたい。

折り返し (sákehe サケヘ): tusunapanu トウスナパヌ

数ある異伝で共通にある折り返しである。tusunapanu トウスナパヌの tus トウシの部分 は、この物語に出てくる haytus ハイトウシ《ツルウメモドキの綱》を暗示しているのだろうか。panu は《頭にかぶる》か？

リズム

折り返しは6~7拍程度、言葉の部分は5~6~7拍程度。この僅かな断片の中にも、いろいろ異なったリズムが出ている。同じ折り返しでも、ときによってはある音節を伸ばし、ときによっては伸ばさない。言葉の部分も、行末をかなり伸ばしているかと思うと別の行では伸ばしていない。前の2編の神謡とはかなり異なる。

完結している近藤テープのほうで調査すれば、もっとはっきりした規則性がわかるかもしれない。

あらすじ

この録音は冒頭の断片のみで打ち切られたので、この録音のあらすじは書けない。

1年2カ月後に近藤鏡二郎氏によって録音されたものは完結している〔異伝・類話〕。

細かい点はともかく、大筋としては、同じような内容の物語を謡うつもりだったろうと思うので、読者への便宜のために、ここにその近藤テープの「角ざめの曲」のあらすじを載せる。

参考：近藤テープの「角ざめの曲」の神謡のあらすじ

ある日、オキクルミとサマユンクルがツノザメ漁に沖へ出た。銛を投げて私(ツノザメ)をしとめた。しかし、私は銛を刺されたまま海のほうへ逃げようとした。舟の上では銛についている綱をオキクルミとサマユンクルがつかんで必死に押さえていたけれども、私はどんどん逃げて行った。サマユンクルは手が血ぶくれだらけになり、しまいに力尽きて死んでしまった。

オキクルミが一人で綱の端をつかんで押さえていたが、私は舟を引っ張って逃げつづけた。オキクルミも手が血ぶくれだらけになった。

オキクルミは私をののしって、こう言った。「おまえを突く銛の先は金(かね)だ。銛先の根元は骨だ。柄はシナの木だ。綱はツルウメモドキの綱だ。お前の体の中で金をたたき音、骨を削る音がして、お前は気も遠くなるほど苦しむだろう。お前の体の片方からシナの木の花が生え、もう片方からツルウメモドキのやぶが生える。その上に鳥がとまり、鳥の糞や小便がお前の上にジャージャーかけられる。お前は苦しんだあげく死んでしまうのだからな。」

人間の言葉だからうそだと私は思ったが、まもなく私の体の中で骨を削る音、金をたたき音がして、私は気が遠くなるほど苦しんだ。体の片方からシナの花が生え、もう片方からツルウメモドキのやぶが生えた。そして頭の上に鳥が止まってその糞や小便が私にかけられた。私は大海原をあっちへこっちへと動き回ったあげく死んでしまうところだから、いまのツノザメはそんなふう人間を殺すほど舟を引っ張って逃げたりするな、と、一匹の悪いツノザメが言った。

トウスナパヌ
tusunapanu

シネアン ト タ
sinean to ta

トウスナパヌ
tusunapanu

オキクルミ
Okikurmi

サマユンクル
Samayunkur

トウスナパヌ
tusunapanu

レバ キ クス
repa ki kus

アルキ ルウエ ネ。
arki ruwe ne.

トウスナパヌ
tusunapanu

イヨペウシ
i=opeusi

イヨペトクパ
i=opetokpa

イヨペートウカン
i=opetukan

シコレ タ ネ ア
sekor he ta ne a?

おばちゃん!

トウスナパヌー

1 シネアント ター

トウスナーパヌー (#)

2 オキークルミー

3 サマーユンクル

トウスナーパヌー

4 レパー キー クス、

5 アルキ ルウエ ネ

トウスナパヌー

6 'イヨペーウシ、

7 'イヨペートクパ'

ア、イ、イヨペトウカン

スコレ タ ネ ア?

ある日

オキクルミと

サマユンクルが

ツノザメ漁に

やって来た。

私を鋸（もり）で刺した、

私を鋸で突いた。

鋸で撃った

というのかなあ。

2-3) オキクルミとサマユンクルは、しばしばベアで登場する。小オキクルミと小サマユンクル(子ども)のベアが登場することもある。たいてい、サマユンクルは人間だから普通のことしかできなかつたり、悪いことをしたり、オキクルミは神だから特別のことができたり立派なことをしたりする。オキクルミは、人間の始祖であるアイヌラックルと同一視される場合もある。サマユンクルは [sama(i)-unkur サマ(イ)・ウン・クル そば(= samor サモロ、本州)・の・人] と解されて、本州の和人(Japanese)だ、と、J. Batchelor に平取下流の Kanturuka カントウルカ が教えた、という記録もある〔「パ辞典」第4版、p.129〕。オキクルミもサマユンクルも、地方によって呼び名も、どういうもの(神/人)を指すかも異なる。

4) repa レパは sirkap シリカフ 《ツノザメ(?) カジキマグロ(?)》≡「題名」の漁に行くことを言う。

6) [i=op-e-usi (引用中の)私を・槍/鋸・その先・を…につける]、《槍/鋸で刺す。y は母音 i と o の間に起入った音。

7) [i=op-e-tokpa ものを・槍(鋸)・で・つつく/たたきつける]《槍/鋸で突く》。y は母音 i と o の間に入った音。しかし、言ってから間違えたのではなにかと気づき、考えている。

7行目の下) 考えながら小声で 独り言を言っている。[i=op-e-tukan (引用文中の)私を・槍/鋸・で・…を撃ち当てる]。…he ta ne a… ヘ タ ネ ア は《…か? /…かな?》。それから、ちょっと席はずしている妹のサタモさんに(当時64歳ぐらい)相談しようとして、「おばちゃん!」と呼んでいるが、結局この日はここで打ち切った。

異伝・類話

これは、よく知られている、オキクルミとサマユンクルのカジキマグロ漁の話である。冒頭の断片を語ったところで、言葉を思い出せず、そこで打ち切りになってしまったが、この録音の1年2カ月ほど後に謡われた次の(1)では完結している。

- (1) 1961年1月5日～12日の間に、札幌市の音楽家、故 近藤鏡二郎氏宅で、同氏によって録音された、歌謡・神謡・叙事詩等20編余の中に、この同じ神謡がある。この神謡を含む複製テープの1本が田村に送られ、もう1本が北海道沙流郡門別町郷土史研究会に所蔵されている。当の神謡は、テープ目録「沙流アイヌの歌謡」(門別町郷土史研究会、1996)の整理番号93で、題は「シリカプ」(角ざめの曲)と書かれている。〔sirkap シリカプの訳「カジキマグロ」と「ツノザメ」に関しては、☞「題名」(p.140).〕そのオリジナルテープは北海道大学文学部に所蔵されている。

異伝・類話の記録はあちこちにあるが、最も古い記録は、おそらく次の(2)であろう。

- (2) B. ピウスツキーのろう管に録音されたもの。吹き込んだ伝承者はわからないが、本資料の謡い手と同じ地方の話者らしく、同じ方言である。リズムが少し違うが、メロディーもよく似ている。

それを聴いて筆記し、訳とコメントをつけたものが、次の報告書に入っている：“Hokkaido Ainu Songs in the Pitsudski Recordings”, by S. Tamura, H. Nakagawa, in *Proceedings of The International Symposium on B. Pitsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, Hokkaido University, 1985, pp.108-115.

次の(3)(4)は、音声とテキストの両方が出版されたものである。

- (3) 「okikurmi sirkap オキクルミ シリカプ オキクルミとカジキマグロ」(折り返し：ト°スナバヌ tusunapanu)(音声とテキスト)、1972年10月9日録音、謡い手：鍋沢ねぶきさん、『萱野茂のアイヌ神話集成』第3巻(萱野茂、ビクターエンタテイメント、1998)。テキストpp.56-73。
- (4) 「フンベ カムイ Humpe Kamuy クジラ神」(折り返し：アトユット atoyutto)〔音声とテキスト〕、謡い手：中本ムツ子、『カムイユカラ』(監修：中川裕、訳・解説：片山龍峯、片山言語文化研究所、1995)、解説pp.97-113。テキストに録音時は書かれていないが、先輩の伝承者の謡った神謡を聴いて練習し、新たに神謡の謡い手になった話者が、1990年代に謡ったものの録音であろうと思われる。ここでは、主人公が sirkap シ

リカフ《カジキマグロ》の代わりに humpe フンベ《クジラ》になっているが、話の大筋は同じである。

以下の (5)~(8) は音声がなく、文字のみの記録である。

- (5) J. バチラーの記録。"TUSUNABANU" [テキスト、英訳つき]、採録：1880年、語り手：Kanturuka カントウルカ(男性)(Piratori-panata 平取の下手の人)、*An Ainu-English-Japanese Dictionary*(『アイヌ英和辞典』)、4版1938、復刻1981、pp.129-132
- (6) 「神謡ツ°スナバヌ(tusunabanu)」、『アイヌ叙事詩ユーカラの研究一』(金田一京助、東洋文庫、1931) pp.389-397、[I バチラーの記録の引用、和訳つき、II ウトムリウクの伝承、III ワカルパの伝承]
- (7) 「神謡67 カジキマグロの自叙 Shirkap isoitak」(折り返し Sakehe・サケヘ：Tusunapanū)(テキスト)、1932年10月17日採集、伝承者：平賀エテノア、『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』(久保寺逸彦、岩波書店、1977) pp.310-315.
- (8) 「神謡68 カジキマグロの神の自叙 Shirkap kamui yaieyukar」(折り返し Sakehe・サケヘ：Tusunapanū)(テキスト)、1935年4月採集、伝承者：二谷国松、『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』(久保寺逸彦、岩波書店、1977年) pp.316-318.